

令和7年度
県大会発表者
作品





私が歌う先にあるもの

宮城教育大学附属中学校 3年 ^{すが} ^{わら} ^こ ^{せん} 菅 原 琥 千

「将来は国連に入って、困っている人たちを助けたいんだよね。」

小学6年生のときのある日の帰り道、友人が私に話してくれた言葉です。調べてみると、「国連」というのは国際平和の維持や社会の発展のための組織で、難民支援や紛争地域での平和維持活動など、世界を幅広く支える活動をしていることが分かりました。顔の知らない誰かのために自分の命をかけられるなんて、すごいと思いました。そしてそこで働きたいと思っている友人を心から尊敬しました。

私はというと、幼い頃から歌がとにかく大好きで、将来の夢は歌のおねえさんとミュージカル俳優。大勢の人の前で歌うことを夢見て研鑽を積み、東京でミュージカルに出演させてもらうなど、徐々に活動の幅を広げていた最中でした。ですが、自分の夢と友人の夢を比べたとき、なんだか自分の夢が独りよがりで自己中心的なのではないかと感じてしまいました。友人は自分ではない誰かのために、私は私自身のためだけに、夢を追っているのではないかと。

それからの私は、「私の本当にやりたいことってなんだろう」と考え続けました。歌のコンクールでは、思うような結果が残せず悔しい思いをすることもありました。決して順風満帆な日々ではなかったのですが、それでも私にできること、私のやりたいことを見つけるために、中学生になってからもひたすら努力し続けました。

そんな中、テレビのニュースで、私の好きなミュージシャンが音楽を通して、国内外で支援活動をしているということを知りました。このとき、誰かのために活動することにも、様々な形があると気付きました。私も自分のやりかたで人を笑顔にできる活動をしてみたい。

そんな思いを抱き始めた中学2年生の冬、幼い頃に通っていた幼稚園で、歌のソロコンサートをボランティアでさせていただけることになりました。相手は幼稚園児、場所は幼稚園のホールです。私には、もっと大きなステージや多くのお客さんの前で歌ってきた経験があります。だからこそ、しっかりやり切る自信がありました。ですが、そこで改めて、「歌の力」に気付くことになるのです。「あおいそらにえをかこう」私が歌い出すと、次第に子どもたちも手をたたき、口ずさみ、互いの緊張がほだけていきました。目の前に広がるのは満開のひまわりのような子どもたちの笑顔。

私の歌に、笑顔で返してくれることが本当に嬉しく、心が震えるのを感じました。ああ、私の本当にやりたいことってこれだったのかもしれない。私の歌が、みんなの笑顔に繋がっている。舞台の大きさや、お客さんの数なんて関係ない。この笑顔のために、私は歌うんだ。「歌う意味」に気付けた瞬間でした。

皆さんには夢がありますか。その夢を追うことに対して、不安になったり、諦めなくなったりしたことはありませんか。私はたくさん悩みました。友人の夢と私の夢を比べ、私の夢は誰のためにもならないのではないかと不安に思いました。ですが、夢と向き合い続けた結果、「歌う意味」を見つけられました。困っている人に直接手を差し伸べる友人の夢。誰かの気持ちに寄り添い、そっと背中を支える私の夢。夢の形は違えど、どちらも誰かの笑顔に繋がっていると気付きました。私は、自分の歌が誰かを支えることに繋がるのなら、歌い続けたい。「この人の歌が安心できる居場所なんだ」と思ってもらえるように頑張りたい。いつか憧れのミュージシャンのように、歌で社会貢献ができるような人になりたい。私が歌う先にあるものを求めて、これからも歩み続けていきたいと思います。

私に多くのことを考えるきっかけをくれた友人は、今どんなことを考えているのでしょうか。次に会うときには、自分の夢を胸を張って伝えたいと思います。「私は多くの人に歌で笑顔を届けたい」と。

● プロフィール ●

好きなことやもの	歌をうたうことです。幼いころから、童謡やミュージカルの歌に、たくさん触れ合ってきました。今は、クラシックからポップスまで、様々なジャンルの歌に親しんでいます。
苦手なことやもの	速く走ることです。学校の体力テストの50m走も、なかなかタイムが縮まらず、悩んでいます。最近は、走り方のコツを調べたりしながら、頑張っている走っています。
将来の夢	私の歌を通して、誰かを元気づけたり、助けたりすることです。そのために、歌のおねえさんやミュージカル俳優などになりたいので、今は歌の練習を頑張っています。



青少年のための宮城県民会議会長賞

夢を失っても

仙台市立寺岡中学校 3年 フェイガン ^{る き な} 瑠輝奈

みなさんは、夢を失ったことがありますか。私は、自分のすべてであった大きな夢を、たった一度の怪我で失いました。

私の夢は、フィギュアスケート選手になることでした。いつかオリンピックに出て、金メダルをもらうことを夢見ていました。この夢を叶えるために、思いつくすべての時間を費やしました。睡眠時間や食事の時間、友達や家族と過ごす時間。登校前に朝練、放課後すぐにリンクへ。移動時間に勉強を済ませ練習。車の中で夕飯を食べて夜練。毎日毎日練習を重ねて、大会では、賞状やメダルをたくさんいただきました。

ある日、私はいつものようにジャンプの練習をしていました。その日はいつもよりやる気に満ち溢れていて「絶対に跳べる。」そんな気がしていました。「先生が教えてくれた通り、いつも通りにやろう。」そう思いながら、次々にジャンプを成功させていきました。自信がついてきた私は徐々にスピードを上げ、ジャンプを飛ばそうとした、その時です。私は転び、背中からリンクに叩きつけられました。理解がまったく追いつかず、立ち上がることもできません。私は尾てい骨を強打し、スケート選手になるという大きな夢の幕を閉じました。

スケート以外に何もしてこなかった私は、夢も希望もこれまでの努力も、何もかも失った絶望でいっぱいでした。

しかし、私を優しく支えてくれる家族や仲間がいました。ダウン症であり福祉施設で働いているおじは、暗くなっている私を元気づけるために、施設のお祭りに連れて行ってくれました。そのお祭りは、運営もすべて障がいのある方が行っていました。自分にできることを見つけ、たくさんの人を楽しませようとしている姿を見て、わたしも頑張ろうと立ち上がる勇気ももらいました。

母は「新しい何かを見つけるために」と、習字や絵画に挑戦させてくれました。何度も何度も挑戦するうちに、「自分の想いをそのまま形にできる」ということに感心し、芸術の素晴らしさを知りました。絵画では、ネガティブなことばかり考えてしまうとどんどんパレットが汚れていき、作品全体がにごってしまいます。習字も同じで、自分の感情がそのまま作品に表れます。今では、墨の香りに浸り集中力を高め、一発勝負で書くことが大好きです。絵画と習字の先生はよくこう言います。「なにか成し遂げたいことがあるなら、まずは気持ちから。」前向きに挑戦し続ける気持ちを

もつことがどれだけ大切か。絵画や習字に出会わなければ、私はこのことに気が付かなかったかもしれません。

そんなある日、人数不足で大会に参加できない妹が「一緒にバレーボールをしよう」と何度も誘ってきました。私は球技が大の苦手でしたが、挑戦してみることにしました。当時小学6年生だった私は、チームで唯一の最高学年。みんなより経験も少ない中、必死に練習に励みました。私にもできることはないか。そうだ、笑顔で声を出して、チームを盛り上げればいい。今までは自分との戦いだったけれど、バレーはチームプレー、仲間を頼っていいんだ。自分ができることを精一杯やればいい。そう思えるようになりました。卒業大会ではキャプテンを務め、チーム全体で一生懸命戦いました。結果は負けてしまいましたが、みんなが私の卒団を惜しみ、泣いてくれました。私も優秀選手賞をいただき、最高の思い出ができました。

私は、自分のすべてを失った絶望でいっぱいでした。しかし、支えてくれた家族や仲間のおかげで、興味がなかったことや苦手だったことから学び、今まで知ることのなかった新しい自分に出会い、幸せを実感できました。失った夢が大きければ大きいほど、悲しみも大きい。しかし、今まで見ようとしてこなかったものにも目を向けられるのです。夢を失ったとしても、きっとそれはいい経験です。私はこれからも、壮大な夢を見つけて、それを叶えるために、もっと色々なことに挑戦します。「なにか成し遂げたいことがあるなら、まずは気持ちから。」今までとは違う自分に出会うことを目指して。

● プロフィール ●

好きなことやもの 映画鑑賞、音楽鑑賞、読書をするのが好きです。好きな科目は英語で、洋楽とラップが好きです。

苦手なことやもの セロリを食べること。

将 来 の 夢 まだ夢は決まっていますが、これから様々なことにチャレンジして、自分が納得できるような人生を歩みたいです。



青少年のための宮城県民会議会長賞

私たちにできること

丸森町立丸森中学校 3年 菊 地 南

みなさんは、自分の住む地域の課題は何か、どんな政策がとられているか知っていますか。

私は考えたこともありませんでした。あの日までは、消滅可能性自治体。その衝撃的な言葉が私の目に飛び込んできたのです。なんと、私の住む丸森町は、2050年までに、人口が激減し、最終的には消滅してしまうというニュースでした。

このことについて調べてみると、2020年からの30年間で、子どもを産む中心となる人口の減少率が50パーセントを超えると予想される自治体のことだそうです。その中でも、丸森は減少率が75パーセントと、県内一だと出てきました。

「え？なんで丸森が？子育て日本一と掲げているはずなのに。」

疑問やショックで胸がいっぱいになりました。

どうしても不安になった私は、祖父と話してみることになりました。私の祖父は丸森町の町長です。このことに一番詳しいであろう祖父はどう考えているのか、聞きたかったのです。

「じいちゃん。丸森って、消滅可能性自治体って言われてるんでしょ。対策として何かしてることあるの？」

すると祖父は、少し苦い顔をしながらこう言ったのです。

「丸森は、少子高齢化も深刻だから、若い人が残れるような政策をとってるよ。」

そう答える祖父は、いつもの優しくて面白い祖父とは違い、真面目で真剣な眼差しをしていました。

その「政策」とは、子育て世帯の負担軽減のため、保育料や給食費、子どもの医療費を無償にするものです。出産入学祝金もあります。祖父は、便利で人とのつながりを大切にしたいと熱く語っていました。

「なんでこういう政策があるのに、丸森は若い女性の減少率が県内一になってしまっているんだろう。」と疑問が湧いてきました。

そこで、母にも話を聞いてみることにしました。

「そりゃあ消滅してほしくはないよ。でも、若い人が就くような仕事はないし、大きい都市と比べたら、安心して子どもを産み育てられないよね。産婦人科だってないし。」

確かに、若い人の仕事や、安心できる施設が丸森にはありません。これは町の課題なのではないか。

そう考えていた矢先、私の考えがさらに深まる出来事がありました。それは、「模擬議会」です。模擬議会とは、町の議場で実際の議員さんに、私たち中学生が一般質問をするというものです。その一般質問のためにクラスで町について改めて考え、話し合いました。私のクラスでは、

「災害時のためにも体育館にエアコンを入れてはどうか。」

「大きな商業施設を誘致したらより住みやすくなるのではないか。」

という意見を議員さんにぶつけてみることにしました。

そして迎えた本番。普段とは異なる厳かな雰囲気緊張しました。何より驚いたのは、私たち中学生の意見に大人たちが、それも町政の中心となる人たちが真剣に答えてくれたこと。発せられる言葉、声に迫力がありました。私たちの出した案に対しても他地区の実態や予算をふまえて回答してくれました。会の終わりには、なんと前向きに検討したいと言ってもらえたのです。手応えを感じました。

こうしてクラスメイトと話したり、大人の考えを聞いたりしたことで町をよりよくする方法は実はたくさんあるということがわかりました。

立場や性別が違えば、見えているものや思いも違う。それでも私の住む町には、よりよい未来について真剣に話し合える仲間や、それを真摯に聞いてくれる大人たちがいる。このことは、町の未来への希望だと思えます。子どもも大人もまずは知ることが第一歩です。そして、自分なりに考えること。自分一人が考えたって……とって何もしなければ現状は変わりません。私たちが望むこうなったらいいなという夢や希望は、遠くの誰かが知らないうちに叶えてくれるのではなく、今の自分と地続きでつながっているのです。だから、恐れず声をあげてみて欲しいです。そうして一人ひとりが向き合えたとき、きっとよりいっそう素敵な地域になると思うのです。

● プロフィール ●

好きなことやもの

私の好きなことは、2つあります。1つ目は読書です。特に物語の本が好きで、家や学校で、たくさん物語を読んでいます。2つ目は音楽を聞くことです。いろいろなジャンルの音楽を聞いたり、それに合わせたダンスを見たりすることも好きです。

苦手なことやもの

私の苦手なことは絵を描くことです。抽象画、具象画どちらも苦手で、自分が思い浮かべたものを描くことが上手くできません。同じように文章で自分を表現することも苦手です。今回の作文も上手いかわないことが多く、大変でした。

将来の夢

私の将来の夢は、具体的には決まっていませんが、人と関わる仕事に就きたいと考えています。また、丸森に住んでいながらできる仕事、戻ってこれる仕事がいいと考えています。



優 良 賞

「知ろうとしなかった」あの時の私へ

石巻市立渡波中学校 3年 ^{おお}大 ^{かべ}壁 ユ ウ

「偏見」にとらわれ、「違い」を嫌った自分がいました。

ハーフである私の人生は、インドネシアで始まりました。日本での暮らしは6年目、学校には小学校4年生から通っています。

小学生の時、インドネシアの「手で食べる文化」を友達に話したことがありました。

「インドネシアって貧乏などこなんでしょ？」

インドネシアでは手で食べることが、宗教的な理由からいちばんきれいな方法とされています。詳しく話さなかったこともあり、友達は笑いました。悪気なく笑われたことに私は悲しくなりました。この時のことが、私の意識を変えていきました。

日本の文化とインドネシアの文化、その中間にいた私は、次第に「インドネシアの文化は変」で「日本と比べて劣っている」と考えるようになりました。さらに日本に住み、日本人の良さを知ることによってその考えは、より強くなっていきました。

日本の良さを知るたびに、私の中のインドネシアの印象は悪くなっていきました。

「どんな国にも良い人も悪い人もいる」と理解していても、「文化の違いが人を作るのだ。」と考えるようになりしました。そのうちに私は「日本人は親切な人が多い」イコール「日本人以外は親切ではない」と無意識に変換するようになったのです。

中学生になり、夏休みに、母の母国であるインドネシアに家族で行くことになりました。楽しみな反面、インドネシアに偏見を持つ私は、人や文化の触れ合いを完全に避けていました。そんな中、母の親戚が家に招待してくれ、1週間ほど宿泊することになったのです。家には親戚だけでなく、近所の人たちもいました。私にとっては会ったことのない人達ばかりです。

手で直接食べ物を口に入れることにも抵抗があり、私は箸を持参して食事をしていました。その姿を見ていところが言ったのです。

「私にも箸を使わせてくれない？箸を使うってどんな感じなのか知りたいの。」

驚きました。私はインドネシアに慣れようとせず、ただ帰りたいとばかり思っていました。それなのに、いそこは知りたいと、興味を持って言ったのです。

別れの日、親戚だけでなく近所の人たちまで別れを惜しんで泣いてくれました。たった1週間、たかが1週間過ごただけです。それでも

「さみしい。」

と言ってくれました。

私は後悔しました。もっと一緒に過ごしたかった。こんなにも素敵な人達をなんで知ろうとしなかったのだろうと。いそこは日本の文化を「知ろう」としたのです。

私が持った「偏見」は日本以外の文化や人々を拒絶し、知ろうとすることをやめたときから生まれたと思います。世界の国々にはたくさんの人が住み、それぞれの文化や習慣を持っています。ひとりひとりもみんな違います。それに優劣など無いのです。他者や周りからの印象を偏見と取り違えず、「違い」を楽しむことは今、とても大切です。きっと「違い」がない世界は退屈で、「違い」は世界にとって価値があるから。

この価値を見いだせた私の体験もまた、宝のようであると考えます。

私はもう「偏見」にとらわれることはないでしょう。「違い」を知ることによって、これから生きていく私の世界はいくらか素敵なものになると知ったから。

● プロフィール ●

好きなことやもの だれかと旅行や、旅行の予定をたてること。非現実的な本や物語を見たり、読んだりして、たくさんの想像をすること。明日の食べる予定の朝ごはんが好きなたべものだったときの時間。

苦手なことやもの 長い間、全く同じことをしていたり、刺激のない日常、楽しくない環境で過ごし頑張ること。

将 来 の 夢 場所にしばられたりしない自由な仕事に就いて、色んな体験をし、変化し続ける日常をつくること。



優良賞

「関わって、届ける」

気仙沼市立唐桑中学校 3年 おの男 とら席 なぎ風

皆さん。もしあなたが、自分でも気づかないうちに、誰かに「元気」や「笑顔」を届けていたとしたら、とても嬉しいことで、とても素敵なことだと思いますか。

5月の夕暮れ。犬の散歩をしていた私が、同じく散歩をしている、高齢のおじいさんに会った時のことです。おそらく100歳近い年齢の方ですが、そのおじいさんが、私にこう話しかけてきました。

「今度学校が再編して、唐桑中学校が、なぐなるんだってなあ。」

私の通う唐桑中学校は、鹿折中学校との再編の計画が進められています。

友達と笑い合った教室、部活動で汗を流した体育館。その校舎から、中学生の姿も、声もなくなってしまうかもしれません。来年の春に卒業する私は、新しい校舎で生活することはありませんが、それでもやはり寂しい気持ちはありました。ただ、そんな気持ちになっているのは、当事者の私達小・中学生だけだと思っていました。

けれども、そのおじいさんが続けてこうおっしゃったのです。

「あんだ達中学生の声が、このあたりから聞こえなくなるのは……寂しいなあ。」

私は胸が熱くなりました。そして思わず「ありがとうございます。」

と言っていました。私達のことを、そんな風に思ってくださっていたなんて、気づきもしませんでした。私は、何だかとても温かい気持ちになりました。

そしてその時、ふと思い出したことがありました。私が小学校2年生から所属している、松園虎舞保存会の皆さんも、いつも言うてくださるのです。「あんだ達のような若い人が頑張る姿を見ると、こっちも元気をもらえるよ。」

この地域の方々は、かつて、あの大地震を経験し、ふるさとの地を建て直すため、そして、幼かった私達を守るため、涙を拭い、歯をくいしばり、必死に立ち上がって来た方々です。

今、目の前にいるこの高齢のおじいさんも、当時1歳に満たない私のお風呂のため、井戸水を提供してくださり、野菜やおむつ、ミルクまで差し入れてくださったと、母から聞いたことがあります。

腰をかがめて、ゆっくりゆっくり歩いていくそのおじいさんを見送りながら、「寂しいなあ。」とおっ

しゃったその言葉を、私は忘れることができません。(何かしてあげたい) と心の底から思いました。

私達はこれまでずっと、地域の方々に見守られてきました。そして、長い時間をかけて育まれてきたその優しさを、確かに受け取りました。そんな方々が、「あなた達を見ると元気になれる」「声が聞こえなくなるのは寂しい」と言うてくださるのです。それなら今度は、私達が地域の方々に「元気」をお届けする時だと思いました。

特別なことでなくていい、できることは、たくさんあるはずです。たとえ校舎に私達の姿がなくなったとしても、登下校時に「おはようございます。」「ただいま。」のあいさつを交わすことができます。虎舞の太鼓の晴れ舞台や、地域行事に参加する、それら一つ一つが、きっと地域の方々に、「元気」をお届けできるのではないかと、思うのです。

何気ない言葉を交わし、たくさんの方々と触れ合えるこの唐桑が、私は大好きです。その温かさにたくさん助けられてきました。

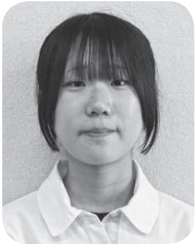
これからも、ずっとずっとつながっていくこの唐桑の方々に、たくさんたくさん関わりながら、私は「元気」を届け続けたいと思っています。

● プロフィール ●

好きなことやもの 舞台やミュージカルをみるのが好きです。俳優さんたちのいきいきとしている演技をみると元気が出るからです。また、食べているときに1番幸せを感じられるので、食事也喜欢です。

苦手なことやもの 生クリームやいちごなどの甘いものが苦手です。特にケーキが苦手ですが、食べる機会が多いので克服できるよう、頑張っています。

将 来 の 夢 私は、小さい子どもの笑顔を見ると元気がでくるので、保育士になりたいと思っています。保育士になって子どもたちの生活の安全を守り、人との関わり方を教えたいです。



優良賞

指一本で落とす命

大崎市立田尻中学校 3年 佐々木 煌 璃

「キモい」「死ね」「消えろ」

私たちは今、たった一本の指で誰かの人生を左右してしまえることをご存じですか。本名や顔を出さずに利用できるSNSでは、あまりにも無責任で、無慈悲な言葉が指一本で打ち込まれ、誰かの心を傷つけています。そして、誹謗中傷を受けた人が自ら命を絶つという悲しい出来事を耳にすることもあります。

私が密かに応援しているインフルエンサーが、突然活動を休止するというニュースを目にしました。その原因は、誹謗中傷でした。画面の中ではいつも笑顔で、沢山の人を励ましてくれたその人が、誰かからの心ない言葉で活動を休止しなければいけないという事実、胸が苦しくなりました。しかも、活動休止を発表した投稿のコメント欄には、「そのまま消えろ」「休止おめでとう」など、信じられない言葉が並んでいました。あんなに一生懸命に、自分の身を削るように頑張っていた人が、無責任な言葉に追い詰められてしまったなんて、悔しくて、悲しくて、言葉になりませんでした。

コメントを残した人は、「そんなつもりじゃなかった」「冗談じゃん笑」と言うでしょう。たった一言書いただけ。みんなだって言っていた。そんな軽い気持ちで、積み重なれば凶器にだってなります。目に見えない分、深く突き刺さり、二度と消えることのない傷となるのが言葉という刃です。

自分は加害者になるわけがない、と思っている人も多くいます。本当にそうですか？誰かを傷つける投稿を見て笑い、拡散した。それも立派な「加害者」と言えるのではないのでしょうか。

大きな社会問題となっている誹謗中傷。誹謗中傷をしない、加害者にならないために必要なのは「想像する力」だと私は思います。今打ち込もうとしているその言葉、拡散しようとしているその投稿は、本当に正しいものですか。もし自分が同じ言葉を投げかけられたら、笑っていられますか。もしその一言がきっかけで相手が命を絶ってしまったら、あなたは胸を張って生きていけますか。投稿する前に、一度深呼吸をして、想像してください。

SNSも現実社会も、人と人とが支え合って成り立っています。見えないから、匿名だから、関係ないから、そういう意識のままでは、社会はどんどん冷たく、苦しいものになってしまいます。画面の向こうにいるのも、同じ人間です。喜び、悲しみ、悩み、痛みを感じる、誰かの友人であり、誰かにとって大切な人

です。私たちは、たった一本の指で、そんな誰かにとって大切な人の命を奪うことだって、できてしまうのです。

私たちは、SNSという便利な道具を手に入れた代わりに、言葉の力を使う責任をこれまで以上に背負っています。私たちは、誰かを傷つけるためではなく、支え合い、助け合うために言葉を持っているはず。優しい言葉を選び、支える言葉を届ける。それができるのも、私たちの指なのです。指一本で落とす命がある。でも、指一本で支えることのできる命もたくさんあるはず。ならば私は、誰かを落とす指ではなく、誰かを支える手を持つ人間でありたい。

この言葉が誰かの心に届き、少しでもSNS利用者が誹謗中傷の被害者に、そして加害者にならないことを、心から願っています。

プロフィール

好きなことやもの

コレクトすることです。自分の好きなものを少しずつ集めていくことに達成感があるからです。同じジャンルでもデザインの違いを見て比べたり、並べて眺めたりすることで、自分だけの好きな世界が広がっていくように感じるからです。

苦手なことやもの

マルチタスクが苦手です。理由は、同時に複数のことをすると集中力が分散しどうしても中途半端になってしまうからです。

将来の夢

美容部員や美容カウンセラーになることです。私は人と話すことが好きで、相手の気持ちを聞いたり、寄りそったりする時間にやりがいを感じるからです。相手が頑張っていることを応援したい気持ちも強く、その人の魅力を引き出すことで自信を持ってサポートをしたいです。多くの人を笑顔にできる存在になるのが私の一番の大きな夢です。



優 良 賞

声を出す勇氣

登米市立津山中学校 3年 ^{こん の し い な} 金 野 史 菜

「まあ、みんながそう言うのならそれでいいや。」皆さんはこう考えたことはありませんか。私はあります。周りとは違う考えを言うと「変わっているね。」「空気読めないの。」と思われるのではないかな。そんな不安が頭をよぎります。

私は小さいころから周りの空気を読んでばかりで意見を言うことが苦手でした。クラスで話し合いをするときも、自分の意見を言えずに周りの意見に合わせたり、流されたりすることがほとんどでした。

今でもはっきりと覚えていることがあります。それは、中学1年生の時、様々な職種の方から講話をいただくキャリアセミナーという行事の事前計画でのことでした。事前に割り当てられていた講座ごとに集まり、講師の方への質問を考えていた時です。ある一人の先輩が「まず、年収は絶対でしょ。」と笑いながら話していました。その場にいた他の先輩方もその言葉に乗っかるように、「いいね、いいね」と笑いながら話していました。私は内心「え、それって講師の方に対して失礼じゃないのかな。」と不安になりました。その場にいた他の先輩方や同級生も誰も何も言えない雰囲気になり、居心地が悪い時間が流れました。私は年収のことを聞くことは、相手に失礼だとわかっていながらも、こんな空気の中で「年収を聞くことは失礼なことだと思うのでやめた方がいいと思います。」なんて言ったら白い目で見られてしまうのではないかな。と後ろ向きな気持ちが私の口を重く閉ざしました。結局何も言えないまま話し合いは進み年収を聞くことは決定事項となってしまいました。

そのあとも私は何とも言えないもやもやとした気持ちを抱え続け、キャリアセミナー当日を迎えてしまいました。「講話をいただく立場で失礼なことを聞いてしまう…。」そんな不安が重くのしかかり、いてもたってもいられませんでした。「あの時勇氣を出して、『年収を聞くことは失礼だと思います』と一言言えてれば。」後悔先に立たずとはこういうことかと痛感しました。

「年収はいくらくらいですか。」遂にこの質問がされる時がきました。講師の方は、「それについては調べればでてくると思います。」と気まずい表情をしながら答えました。「ああ、やっぱり聞くべきではなかった。」悔やんでも悔やみきれませんでした。

この経験から私は、「自分の考えを言葉にすること」の大切さを学びました。もちろんその場の空気を感じ

取ることや、周りの意見に耳を傾けることも大切です。しかし、周りの意見に流されるばかりでは、自分の意見を言えずに、自分の心にふたをしてしまうことになる。何も言わないままでは、何も変わらない。だからこそ、自分の意見を持ちそれを相手にしっかりと伝えることが必要です。もし誰かが自分と違う意見を持っていたら、それは話し合うチャンスであり、分かり合えるチャンスでもあるのです。そんな思いを持つようになってから、徐々に自分の意見を伝えられるようになりました。2年生の頃運動会実行委員会で、学年種目について話し合った時。借り物競走のお題を考えました。ここで自分の意見をしっかりと伝えよう。そう決めて言葉にすることにしました。防災に関する借り物競走だったため、「消防士の人！とかは？」「実際に消防に通報したことある人とかどうか」と伝えると、「いいね、面白そうじゃん！」と大好評。実際に運動会で採用されました。言うてみることで変わる、身をもって経験することができました。

本当に人と分かり合うための一番の近道、それは自分の思っていることを言葉で伝えること、そして周りに流されない強さを持つこと。伝えることで誰かの今後が、自分の今後が変わるかもしれない。皆さんも、周りを恐れず、自分の意見を伝えていきましょう。そうしたら、何かが変わるはずだから。

● プロフィール ●

好きなことやもの 外に出かけることや音楽を聴く・歌うこと。
好きな食べ物はフルーツ。

苦手なことやもの 苦手なものは虫ときのこと。
苦手なことは習字と水泳。

将 来 の 夢 人の幸せにつながる仕事に就くこと。



優良賞

そっと手を差し伸べる勇気を

塩竈市立第三中学校 3年 ^{ふじ}藤 ^{しろ}代 ^み美 ^{づき}月

「私って普通？変じゃない？ちゃんとできてる？」

妹から突然投げかけられたその言葉に、当時の私は戸惑いを隠せませんでした。いつもお手伝いを率先してこなす優しい妹。しかし、そのゆっくりとした動作に焦りや怒りを覚えることもあった私にとって、その問いは、まさに核心をつくものでした。妹は普通ではないのか、そもそも普通とは何なのか。私は何も答えることができませんでした。

私が小学生の頃、妹は病気の影響による、「境界知能」と診断されました。その時のことは未だに鮮明に覚えています。医師から診断の結果を聞いた母の顔は蒼白で、幼い私は何が起きたか理解できず、その妹の行動が困難を抱えているが故の行動だと知ったのは、もう少し後のことでした。

境界知能とは、平均とされる知能と知的障害とされる知能の境界に位置する知能のことです。日本では、約14パーセントの人が境界知能に該当すると言われていて一方で、境界知能のことはまだ一般的にはあまり知られておらず、困難さも目に見えにくいです。そのため、必要な支援を受けられずに苦しんでいる人が大勢います。私の妹もそのうちの一人だったのです。

「私って普通？変じゃない？ちゃんとできてる？」

「あの時、妹の気持ちに寄り添おうとしていれば…理解しようと努めていれば…」

私も、どう接していいかわからず、妹を見て見ぬふりをしてきた一人でした。妹のことを理解しようとしたことで、今まで気づかなかった、気づかないようにしていたことにも目を向ける余裕が生まれました。相手の立場に立つ視点を持ったことで、世界が少し広がったように感じました。

かつての私は、妹の苦しみに気づけず、妹のことを苦手だ感じていました。しかし、彼女の困難や葛藤を知った今、私たち家族は妹の個性だと理解し、受け入れたことで、妹は安心して過ごせるようになりました。そして、妹と同じ悩みや苦しみを覚えている人が安心して過ごせる社会になることを心から願っています。

す。目に見えない困難は、周りからは理解し難いものです。「どうしてこんなこともできないの。」冷たい視線やもどかしさは当事者にしか分かりません。だからこそ、相手の立場に立ち、その人の心に真摯に耳を傾けることが何よりも大切だと思います。私は自分にこう誓っています。目の前の人の表情や行動だけで判断せず、その奥にある心の声に耳を傾けること。そして、困っている人を見かけたら、「何か力になれることある？」と声をかける勇気を持つことを。そのたった一言が誰かの傷ついた心を癒すきっかけになるかもしれません。私は困っている人に手を差し伸べられる人でありたいと思います。周りに困っている人がいるなら、その声なき声に耳を澄ませましょう。その先にある誰もが安心して過ごせる社会になることを信じて。「どうしたの？」そっと手を差し伸べる勇気を。

● プロフィール ●

好きなことやもの 読書を通して、新しい知識や自分にはない価値観に触れることが好きです。

苦手なことやもの 新しい環境や初対面の人には、なかなか自分から話しかけられない人見知りな一面があります。

将 来 の 夢 税理士です。数字を扱うことが好きで、将来は人の役に立つ仕事がしたいと考えています。



優良賞

Until we are all equal

宮城県仙台二華中学校 3年 はや 早 坂 さか みどり 翠

知らず知らず差別をしていた自分に気付く。皆さんは、そんな経験をしたことはありませんか。私は、自分の中に潜む差別意識に気付かされる経験をしたことがあります。

私は、宮城県仙台市の中心部から約30km北西にある色麻町という町に住んでいます。町の西側には奥羽山系の山並み、東側には大崎平野が広がる、農業が盛んな、のどかな町です。この町から、私は、毎日、90分かけて、仙台市内にある中学校にバス通学をしています。毎日同じバスに乗っていると、他の乗客とも顔なじみになります。ある日、帰りのバスを待つ私に、一人の女性が話しかけてきました。今まで、自分の得意なことや好きなことを仕事にしてきたこと、今は、バスで仙台の学校に通っていること、女性は色々な話をしてくれました。私は、大人なのに学校に通っていることを少し意外に感じました。聞くと、その女性は、高齢の父親の介護が必要になったときのために、福祉について勉強しているのだそうです。女性は「来年、還暦を迎える歳だけど、学校に通っているんです。」と朗らかな口調で語っていました。

帰宅し、翌日の学校の準備をしている時に、澄刺としたあの女性の姿が思い浮かびました。私は、好きなことを仕事にできることも、父親のために学校に入り、勉強し直すことができることも「ステキだな」と思いました。憧れに似た感情？しかし、何か腑に落ちない。もしかして年齢にたいする偏見？大人が学校に通うことは珍しい、つまり、普通ではないという考えを、自分が持っていることに気付いたのです。もう一度、あの女性の顔が浮かび、「失礼なことを言ってしまったかもしれない」と不安になりました。それ以来、私は、「普通だったらこう」と自分に引きつけるのではなく、「こういうのもあるんだな」と相手を受け入れるように努めています。

偏見や思い込みによる、無意識な差別的発言や否定的な言動を「マイクロアグレッション」と言うそうです。「マイクロアグレッション」は私たちの身近に溢れています。溢れているのに解決が難しいのは、その言動が無意識下に隠れているからです。隠れた攻撃性は知らず知らず相手の心を傷つけ、時に人権を侵害する、重大で深刻な差別に繋がります。

この隠れた攻撃性を可視化し、改善するためにはどうすれば良いのでしょうか。まずは、意識の俎上に乗せることが大切ではないでしょうか。そこで、私は、

世界が直面している差別を調べてみることにしました。私の隠れた攻撃性はエイジズムでした。

エイジズムという語の発祥は1969年と言われています。こんなに古くから年齢差別が存在し続けていることに驚きました。現在、世界が直面している差別は、エイジズムだけではありません。エイジズムと合わせて三大差別と言われるレイシズムやセクシズム、少数者の権利、先住民族、障害を持つ人々、移住労働者等、様々な差別があります。こうした差別を放置すること、こうした差別に無知であることによって、人々の無意識下に、隠れた攻撃性が自然と育まれるのだと思います。

差別を解消するため、実効ある具体の行動を起こすことは大切です。しかし、中学生である私達にとって、差別を知ることでもまた大切です。差別を差別として認識することは、差別のない未来、差別のない世界の創造に繋がっていると思います。こう考えるきっかけを与えてくれたのは、同じバスに乗車する、あの女性でした。色々な人と関わることで、己を知り、多様な考え方ができるようになるのだと思います。

差別はなくなっていくべきです。偏見や思い込みをなくし、互いの違いを認め合うことは確かに簡単ではありません。しかし、Until we are all equal私は、これからも、人との触れ合いを大切にしたい。そうした関係性を結ぶことが、平和な世界、差別のない未来につながると信じます。

● プロフィール ●

好きなことやもの	映画やアニメを見ることです。特にディズニーが好きです。中でも「ノートルダムの鐘」のエスメラルダの芯の強さに魅かれます。運動すること也喜欢で、バスケは小学校1年生の頃から続けてきました。高校で頑張りたいと思います。
苦手なことやもの	数学がとても苦手です。計算問題を解くのが苦手です。しかし、克服するために、家で勉強する時間を増やし、分からない問題を友だちや先生に聞いたりしています。
将来の夢	私の将来の夢は、1人1人と向き合える医師になることです。そのために、学校での勉強を頑張っています。また、医師には体力も必要なので、部活の他にも、家の周りをランニングしたりしています。



優良賞

1200分の1の私

栗原市立栗原西中学校 3年 ^{すが}菅 ^{わら}原 ^{しお}汐

「アルポート症候群」という病気を知っていますか？この病気はあまり知られていない難病の1つです。日本での患者数はわずか、1200人程度と言われており、その希少性から、名前すら聞いたことのない人がほとんどだと思います。

私は、その1200人のうちの1人です。この病気の特徴は、腎臓の機能が低下し、耳が聞こえにくくなる難聴や、目の異常である白内障といった症状が現れる可能性が高いということです。発症すれば日常生活に大きな影響を与える事は間違いありません。幸いなことに、私は現在、ほとんど症状がなく、家庭でも学校でも何不自由なく日常生活を送ることができています。

しかし、同じ病気を持つ人の中には、幼くして腎臓の機能が低下し、透析を受けている人や、聴力、視力を失った人も大勢います。同じ病気であっても、症状の進行や重さに大きな個人差があり、とても驚きを感じたとともに、「もっと病気のことを知りたい」、「自分の病気と正面から向き合いたい」と思うようになりました。そうした中で、自分だけが無症状であることに、時折、捉えようのないモヤモヤとした葛藤を抱くことがありました。そんな時、いつも頭をよぎるのが「1200分の1の自分に何ができるのだろう」ということです。

希少な病気であっても、症状のない私は、重い症状が出て、不自由な生活を強いられている人に対して、何か役に立てないだろうか。

そう考えた自分にできること、それは「知ってもらうこと」でした。名前すら知られていない病気があると言うことは、多くの無関心につながり、結果として治療法の研究も進まなくなってしまうのです。だからこそ私は、自分の存在を通して、こういう病気もあるんだということを、皆さんに知ってもらいたいのです。そのような思いから、今、初めて自分の病気のことを皆さんに伝えています。

そしてもう一つ。私は主治医の先生と相談し、神戸大学医学部で行われているアルポート症候群の調査研究に協力することにしました。この研究は、私が提供した遺伝子情報や定期的な検査数値のデータをもとに、病気の原因や進行に関するメカニズムを解明し、将来の治療法の開発につなげようとする取り組みです。この研究への協力を通じて、自分も誰かの役に立てるのではないかと、そのような思いから自分の意志で参加を決めました。この誰かの役に立ちたいという経験は、

私の夢にもつながるという結果になりました。

私の夢は、創薬の分野で働くことです。現在、世界中に治療法が存在しない病気があります。特に、患者数の少ない難病の研究や開発は進みにくいという現実があります。しかし、だからこそ私はどんな希少な病気であっても、決してあきらめずに向き合える研究者になりたいのです。創薬という分野は地道で長い道のりです。1つの薬ができるまでには10年、20年という年月がかかることも珍しくありません。ですが、創薬にはその人の人生を一変させる力があります。症状を抑え、進行を食い止め、苦痛を和らげることによって生きる希望を与えることができる。私はその力に強く惹かれ、夢と希望を持ちました。いつか、神戸大学の研究者の方と一緒に、新薬の開発を進めることができれば、こんな嬉しいことはありません。私がアルポート症候群という難病を抱えて感じてきた葛藤、そこで見出した希望を、将来は創薬という形にして、医療に貢献していきたいと思います。

今は自由に学び、考え、行動に移せる時間があります。私に与えられたこの貴重な時間を、誰かの未来に役立てられる時間としていきたい。たとえ1200分の1の小さな存在でも、できることはある。そう信じて、私は今日も前を向いて進んでいこうと思います。病気の克服を夢見ながら。

●プロフィール●

好きなことやもの

- ・読書（ジャンルはホラーやミステリー、青春小説が好きです）
- ・映画鑑賞（ジブリ、ディズニー作品などをよく観ます）
- ・音楽を聴くこと（J-POPやK-POPを好んで聴いています）

苦手なことやもの

- ・勉強すること（集中力が続きません）
- ・早寝早起き（いつも夜更かしをしています）

将来の夢

- ・人の役に立つこと
- ・人を笑顔にすること



優良賞

キャンサーギフト母の病が教えてくれたこと

仙台市立鶴谷中学校 3年 佐藤 克樹

「克樹のお母さん、かつらなの？」

そう聞かれて、私は言葉に詰まり、咄嗟に笑って誤魔化しました。

当時の私にとって、母が癌であること、抗癌剤治療で髪が抜けたこと、かつらをかぶっていること、その一つ一つが整理のつかない「現実」だったのです。

母が癌になったのは31歳のとき。母は妹を妊娠していました。私も、すぐには信じられず、「癌 妊娠中」「癌 30代」と検索しては、ただ漠然とした恐怖を感じていました。治療が始まり、髪が抜け、日に日にやつれていく母の姿を目の当たりにして、ようやく私も「母は本当に病気なのだ」と正面から向き合うようになっていきました。いつも元気で、豪快に笑っていた母の弱々しい笑顔を見るたびに胸が締めつけられました。

その夜、私は母に、友達にかつらについて聞かれたことを伝えました。母は少し黙った後、「そんなに悪そうに思わないで。無理に言うことも、変に隠す必要もないんだよ。でも、もう無くていいかもね。」と静かに言いました。

3日後、母は友人の美容師を自宅に招き、短く髪を整え、かつらを被らずに出かけていきました。私は驚いて、「本当に大丈夫なの。」と聞きましたが、「うん。これが今の私だから。無いものを求めるより、今できることを最大限に楽しみたい。この短い髪も気に入ってるんだよ。」と豪快に笑いました。その姿は、髪がなくても、以前のように堂々としていて、心から母の強さを尊敬したのです。

「癌」は母から多くのものを奪いました。長い髪、体力、仕事、そして安心して過ごせる毎日。でも、同時に母は「受け入れる強さ」と「ありのままを生きる覚悟と勇気」を手に入れたのだと思います。隠すではなく、さらけ出すこと、弱さを抱えながらも前に進むこと、それが人の心を動かす本当の強さなのだと母が教えてくれたのです。

みなさんは「キャンサーギフト」という言葉を知っていますか。癌を通して得られる気づき、出会い、価値観の変化など、苦しい経験の中にも「贈り物」があるという考え方です。母は「癌には癌の人たちの社会がある」というほど、たくさんの「贈り物」があったといいます。いま「AYA世代」(Adolescent and YOUNG ADULT)と呼ばれる15歳から39歳の若者たちにも癌を経験する人が少なくないそうです。進学、就職、恋愛、結婚、出産といった人生の大きなイベン

トと重なる「AYA世代」の癌には、特有の悩みが生まれます。特に、「若いのに癌?」「若いから大丈夫」「病は気から、気持ちで負けなければ大丈夫」といった誤解や偏見が患者を孤独にしています。外見だけでは分からない不安や苦しみが「AYA世代」には一人一人あるのです。

そして、それは、癌ではない私たち「AYA世代」にも言えることです。「見えない痛み」や、口にしない「悩み」は誰でも持っています。そこに寄り添い、支えられるよう、私たちは正しい知識と相手の気持ちを考えられる想像力をもつ必要があるのではないのでしょうか。

母は現在、定期的に検査を受けながらも元気に過ごしています。体は完全に元通りではないかもしれませんが、心は以前よりずっと豊かで、豪快で、強くなった気がします。母の病がくれた「ギフト」は私の生き方の軸となっています。母のように困難を受け入れて生きる人たちが安心して過ごせる社会、一人一人の「見えない痛み」に寄り添える人であること、そうした社会を作ることが、今の私たちに求められているのだと思います。

最後に、私は「見えない痛み」をもつ全ての「AYA世代」に伝えたい。「痛み」を口に出していいのだと。そのさらけ出す勇気が誰かの共感を呼び、理解となり、いつか誰かの「ギフト」へとつながるのだから。

プロフィール

好きなことやもの	野球をすることが好きです。特にヒットを打った時に仲間と喜びをわかちあえることが大好きです。練習してきたことが結果でつながった時の達成感は何よりもうれしいです。
苦手なことやもの	うまく言葉で気持ちを伝えるのが苦手です。考えていることがあってもどう伝えるのが正しいか考えすぎてしまい思いとどまることがあります。少しずつ自分の気持ちを伝えられるようになっていきたいと思っています。
将来の夢	私の夢は学校の先生です。教科は数学で、野球部の顧問になってみたいです。数学や野球をする楽しさ、努力する大切さを伝えたいです。また人の弱みや痛みを理解し人の気持ちによりそえる人になりたいです。



優 良 賞

みんなちがってみんないい？

富谷市立富谷第二中学校 3年 ^{とお}遠 ^{やま}山 ^{せい}聖 ^な夏

「みんなちがってみんないい」多くの人が耳にしたことがある言葉でしょう。正直言って、私はこの言葉があまり好きになれません。今の世の中は、「十人十色」「個性を大切に」「多様性の時代だ」と言われます。

しかし、よく目にするSNSの中は、無責任に人の容姿を批判したり、自分と価値観が異なると、自分の正義を押しつけ、個人攻撃するような言葉であふれています。「みんなちがってみんないい」本当にそう思っているのだろうかという疑問が頭から離れないのです。

それは、私自身が好奇の目に晒された経験があるからです。

私は生まれつき色素が薄く、髪の毛や目の色が周りの人よりも明るく茶色い色をしています。小さい頃はよく、髪の毛のことにについてからかわれたり、髪を染めているのか質問されたりすることがありました。その度に、「私は周りと違うんだ」と心のどこかで思ってしまう自分がいて、だんだんと自分の見た目にコンプレックスを抱くようになりました。

本当は自分を好きになって堂々としていきたいのに、今の世の中が求めている個性とは、万人受けするもので、それ以外は認めてもらえない。だから「ありのままの私を見てほしい」という本音を隠し、自分の心に嘘をついて、傷つかないようにしていました。生きづらいこの世界も、そんな世界に負けてしまう自分も大嫌いでした。

そんなある日、一つの曲に出会いました。「こうであるべきとか絶対はないから、コンプレックスを抱きしめて羽ばたいた」

この歌詞を聴いた瞬間、私の心の中にいたもやもやを言葉にして掃き出してくれたように感じました。「コンプレックスをなくすのではなく、抱きしめる」なんて素敵な表現なんだろう。自分自身を愛せなかったらきっと、幸せにならない、だから自分が見て見ぬふりをしている弱さも丸ごと受け入れて好きになってほしい。彼女の言葉が暗く閉じた私の心の扉をやさしくノックして、さらにこう語りかけます。

「他人に好かれる必要ない、他人に愛される必要もない、他人に尊敬される必要もない、でも、自分のことだけは愛しておきなさい」と。

他人がどう思うかよりも、自分が自分のことをどう思えるかの方が大切なのです。私は自分のことを愛せる人間になりたい。それを叶えるためにやるべきことは、人に合わせることで、自分の容姿を隠すことで

もない。自分のありのままの姿を見てもらうことだと確信しました。

「まず自分の思っていることを怖がらず伝えてみよう。私の中で何かが芽生えた気がしました。」

グループの意見交換や、委員会の話し合い、体育祭のリレー選手決めなど、そのチャンスは次々とやってきました。そこで、自分が思ったもの、感じたものを素直に伝えました。返ってきたのは「それいいね。」「もっとこうしたら？」という言葉。そこに私の考えを否定する人はいなかったのです。私が思っているほど、人と違うことは怖いことではないのかもしれない。そして何より、自分の思っていることを伝えられた自分を好きになれたことが嬉しく、なりたい自分の姿に近づけた気がしました。

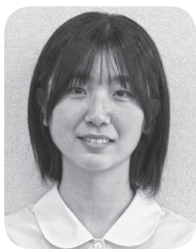
「みんなちがってみんないい」まだまだこの言葉が実現できていないと私は思います。だからこそ私は、傷つくことを恐れず、安心して自分を出せる社会を作りたい。こうして人前に立ち、意見を言うことは、とても大切なことなんだと多くの人に伝えていきたい。「みんなちがってみんないい」違うことが、当たり前だと思える世の中にするために。

● プロフィール ●

好きなことやもの 音楽を聴くこと。マーチングをすること、見ること。小学生の頃は金管バンド、中学1年生から中学2年生までは富谷市のマーチングバンドに所属していました。また、バレエは8年間続けています。

苦手なことやもの 料理をすること。
人見知りなので、自分から人に話しかけることが少し苦手です。

将 来 の 夢 数学の先生になること。



優良賞

見えないもの

仙台市立愛宕中学校 3年 いわもと ゆうな 岩本 侑奈

先日、中学生がいじめに苦しみ、自ら命を絶ったというニュースを目にしました。胸が痛みました。「いじめをなくそう」そんな言葉を、もう何度も聞いてきたのに、どうしてこのような悲しい出来事が起こるのでしょうか。その子の周りにはきっとたくさんの人がいたはずですが、でもその子の痛みには気付くことができた人は、どれだけいたのでしょうか。

私は思います。心の痛みは目には見えません。だからこそ、気付くのはとても難しい。でも、「見えない」ということと、「ない」ということはまったく違います。見えないからこそ、想像することが必要だと思うのです。

私にも心が沈んでいた時期がありました。友達がいなかったわけではありませんでした。でもみんなと同じ場所にいるのになんとなく自分だけ輪の外にいるような気がしていました。話しかけようとしたけれど、うまく言葉が出てこない。笑い声が遠くに感じる。そんな日々が続いて自分の居場所がよくわからなくなってしまったのです。

そんなある日、私は部活動の大会で学校を1日休みました。その大会は私にとって最後の大会で、今までにないほど緊張して挑んだ試合でもありました。結果は、目標にしていたものには届きませんでしたが、私の中ではとても満足のいく試合でした。晴れ晴れとした気持ちでしたが、次の日からまた学校が始まると思うと、少し憂鬱でした。

重い足取りで階段を登り、教室のドアを開けました。いつもどおり、自分の席につき、荷物を整理していると、「お疲れ様。」と声が聞こえました。

私は最初、その声が自分に向けられたものだとは思いませんでした。でも、横を見ると、クラスメイトが明るく柔らかい表情で私に笑いかけていました。突然のことで、驚きました。驚いたけれど、その時、私の心の中になんだか温かいものが広がったことを今でもはっきり覚えています。休んでいた自分のことを気にかけてくれていた人がいたことが、心底嬉しかったのだと思います。何気ない一言。でもその一言に私は救われたのです。

その子だけではなく、私の周りではすぐそばで見守ってくれた人たちがいました。いつも静かに私の話を聞いてくれた母、私の寂しさに気付いて話しかけてくれた先生、他愛もない話で笑わせてくれた後輩。そうしたたくさんの人の優しさが、私を支えてくれたのです。

もし、あの中学生にも、痛みには気付いてくれる人がいれば、一度でも話しかけてくれる人がいれば、尊い命を救えたかもしれない。そう思うと、私たちの「見ようとしないう態度」には、想像以上に重い意味がある

のではないのでしょうか。

では、どうすれば良かったのか。どうすれば私たちは、その見えない痛みには気付くことができるのでしょうか。

答えは簡単ではありません。けれど、第一歩は気付こうとする気持ちを持つことです。いつも笑っているあの子の本当の気持ちに気付くこと。誰かの「大丈夫。」の裏に声にならない思いがあるかもしれないと想像すること。そして、その子に寄り添う行動をためらわないこと。たった一言で、ささいな行動一つで、人は救われることがあります。私はそれを自分の体験を通して知りました。

難しいことではないけれど、勇気のいることかもしれません。声をかけて、自分の勘違いだったらどうしよう。なんて考えてしまうこともあります。でも、私は思います。声をかけて間違えることよりも、何もしないまま誰かの心が壊れていくことのほうがずっと悲しい。

私たち中学生は、まだ子どもだから力がないと思う人もいるかも知れません。けれど私達には「相手を思う力」があります。「寄り添う力」があります。私達に必要なのは、知識でも権力でもありません。見えない痛みには気付こうとする力、そのために一歩近づく勇氣、それは誰かの命を救う力になるはずです。

あのとき私の痛みには気付いてくれた人達のように、誰かの痛みには気付ける人でありたい。あの時貰った優しさを今度は私が誰かの心に届けたい。その行動が、見えない痛みの中で希望の光になると私は信じています。

●プロフィール●

好きなことやもの

私の好きなことは、人と会話することです。なぜなら、人と会話することで、その人の今まで知らなかった一面を知ることができるからです。よく私は1人でいることが好きと思われることが多いです。1人で過ごす時間も好きですが、自分の世界が広がるので、人と会話することが好きです。

苦手なことやもの

私の苦手なことは、自分から人に話しかけることです。何か話しかけなければいけない時も、人の顔が気になって話しかけることができません。また、自分の意見を積極的に人に伝えることも勇気が必要で苦手です。

将来の夢

私の将来の夢は誰かの痛みには気付ける人になることです。無理をして笑顔をつくっている人に気付き、本当の笑顔を取り戻してあげられるような、そんな人になりたいと思っています。